日蓮大聖人御書全集

産湯相承事

うぶゆそうじょうじ

新版
2229
〜
2231

産湯相承事

日興これを記す。

御名乗りのこと。始めは是生、実名は蓮長と申し奉る。後には日蓮と御名乗りある御事は、悲母・梅菊女〈童女の御名なり。平畠山殿の一類にて御座します云々〉、法号・妙蓮禅尼の御物語り御座しますことには、我に不思議の御夢想あり。清澄寺に通夜申したりし時、「汝が志、真に神妙なり。一閻浮提第一の宝を与えんと思うなり。東条の片海に三国太夫という者あり。これを夫と定めよ」

云々。その歳の春三月二十四日の夜なり。正かに今も覚え侍るなり。

我、父母に後れ奉って已後、詮方なく遊女のごとくなりし時、御身の父に嫁げり。ある夜の霊夢に曰わく、叡山の頂に腰をかけて、近江の湖水をもって手を洗って、富士の山より日輪の出でたもうを懐き奉ると思って打ち驚いて後、月水留まると夢物語を申し侍れば、父の太夫、「我も不思議なる御夢想を蒙るなり。虚空蔵菩薩、貌吉き児を御肩に立て給う。『この少人は、我がためには上行菩提

薩埵なり。日の下の人のためには生財摩訶薩埵なり。また一切有情のためには、行く末、三世常恒の大導師なり。これを汝に与えん』とのたもうと見て後、御事懐妊の由を聞く」と語りあいたりき。さてこそ御事は聖人なれ。

また産生まるべき夜の夢に、富士山の頂に登って十方を見るに、明らかなること掌の内を見るがごとし。三世明白なり。梵天・帝釈・四大天王等の諸天、ことごとく来下して、「本地自受用報身如来の垂迹・上行菩薩の御身を凡夫地に謙下し給う。御誕生は唯今なり。無熱池の主・

阿那婆達多竜王、八功徳水を応に汲み来るべきなり。当に産湯に浴し奉るべし」と諸天に告げたまえり。よって、竜神王、即時に青蓮華を一本荷い来れり。その蓮より清水を出だして、御身を浴し進らせ侍りけり。その余れる水をば四天下に灑ぐに、その潤いを受くる人畜・草木・国土世間、ことごとく金色の光明を放ち、四方の草木、花発き、菓成る。

男女座を並べて有れども煩悩無く、淤泥の中より出ずれども塵泥に染まず。譬えば、蓮華の泥より出でて泥に染ま

ざるがごとし。人天・竜畜、共に白き蓮を各手に捧げて、日に向かって「今此三界皆是我有　其中衆生　悉是吾子　唯我一人　能為救護」と唱え奉ると見て驚けば、則ち聖人出生したまえり。「毎自作是念　以何令衆生得入無上道　速成就仏身」と苦我滞き給う。

我少し寐みしようなりし時、梵帝等の諸天、一同音に唱えて言わく「善哉、善哉。善日童子、末法教主釈迦仏」と三度唱えて作礼而去し給うと寤に見聞きしなりと、たしかに語り給いしを聞こしめし、「さては、某は日蓮なり」と

宣

のたまいしなり。

聖人重ねて曰う様は、日蓮が弟子檀那等、悲母の物語と思うべからず。即ち金言なり。その故は、予が修行は兼ねて母の霊夢にありけり。日蓮は富士山自然の名号なり。富士は郡名なり。実名をば大日蓮華山と云うなり。我、中道を修行する故に、かくのごとく国をば日本と云い、神をば日神と申し、仏の童名をば日種太子と申し、予が童名をば善日、仮名は是生、実名は即ち日蓮なり。

久遠下種の南無妙法蓮華経の守護神は、我が国に天下り

始めし国は出雲なり。出雲に日の御碕という所あり。天照太神始めて天下り給う故に日の御崎と申すなり。

我が釈尊、法華経を説き顕し給いしより已来、十羅刹女と号す。十羅刹と天照太神と、釈尊と日蓮とは、一体の異名、本地・垂迹の利益広大なり。日神と月神とを合して文字を訓ずれば十なり。十羅刹と申すは、諸神を一体に束ね合わせたる深義なり。日蓮の日は即ち日神、昼なり。蓮は即ち月神、夜なり。月は水を縁とす。蓮は水より生ずる故なり。また是生とは、日の下の人を生むと書けり。

日蓮は天上天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠なり。今、久遠下種の寿量品に云わく「今此三界　皆是我有〈主君の義なり〉。其中衆生　悉是吾子〈父母の義なり〉。而今此処　多諸患難〈国土・草木〉。唯我一人　能為救護〈師匠の義なり〉」と云えり。三世常恒に日蓮は今此三界の主なり。日蓮は「大恩　以希有事　憐愍教化　利益我等無量億劫　誰能報者」なるべし。

もし日蓮が現在の弟子ならびに未来の弟子等の中に日文字を名乗りの上の字に置かずんば、自然の法罰を蒙ると

知るべし。予が一期の功徳は日文字に留め置くと御説法ありしまま、日興謹んでこれを記し奉る。

聖人言わく「この相承は日蓮嫡々一人の口決、唯授一人の秘伝なり。神妙、神妙」とのたまいて留め畢わんぬ。